

こすもす文庫 ⑨

川崎市ゆかりの彫刻家

長江録彌の世界



写真：表紙－長江録彌作「目覚め」
裏表紙－長江眞弥作「子供たちのために」



川崎市ゆかりの彫刻家

長江録彌の世界



「平和の憩い」



目 次

彫刻家・長江録彌	5
「キリエ」	6
「読書」	8
「永遠の春」(ロードスの印象)	9
「使徒(小)」「頌歌」「牧神の午後」	11
頭像「戸張満江像」「カールベーム」	13
陶壁「多摩川」	16
「ペンギン」	16
長江眞弥紹介	19
「楽想～ソレイユ」	20
あとがき	23
長江録彌略歴	24
長江眞弥略歴	25



彫刻家・長江録彌

彫刻家・長江録彌（日本芸術院会員。（社）日展常務理事。（社）日本彫刻会常務理事。元理事長。）は、2005年4月6日、川崎市高津区の自宅でその生涯を閉じた。

1926年、愛知県瀬戸市に生まれ、1943年、17歳で上京し、多摩帝国美術学校（現多摩美術大学。世田谷区上野毛。）彫刻科に入学。が、太平洋戦争の激化により、その年の秋には徴兵猶予措置が停止され、多くの学生が戦場へ、その他の学生は工場へ駆り出されてしまい、氏も帰省を余儀なくされる。そして、徴集され兵役に。1945年8月、終戦を迎え、戦火で消失してしまった多摩美校を再建しようという学友たちの呼びかけに応じ、1946年、再び上京。多摩美は、世田谷区上野毛に本校舎が再建されるまでの数年間（～1950年）旧軍需工場跡地（高津区久本）の建物の払い下げを受け、仮校舎としてスタートを切ることになる。当初、氏はその仮校舎に学友たちと寝泊りしていたらしいが、1948年、多摩美校を卒業して後も、高津区を離れることなく、1952年には現在の地に自宅兼アトリエを建て、50年余り、彫刻家としての人生全てをそこで過ごした。氏の残した膨大な数に及ぶ彫刻、絵画作品の、ほぼ全てがこのアトリエで生み出された。

氏の作品のコレクションは全国に存在するが、第二の故郷、あるいは彫刻家人生の本拠地であった川崎市には、私的、公的なコレクションがかなりの数残されている。川崎市第三庁舎、高津区役所、宮前区役所、高津図書館、中原区平和公園、



等、等、等。非常に多くの市民が、意識するしないに関わらず、日々、その作品たちを目にし、親しんで来た事は疑いの無い事実だろうが、意外と、それらの作品が、「長江録彌という彫刻家」の作品であることが知られていないのも事実だと思われる。今回、氏の逝去を悼み、川崎市に残されたパブリックコレクション、また個人所蔵の作品を中心に小冊子をまとめてみました。各作品の解説は、氏の長男であり、彫刻家である眞弥氏によるものです。

「キリエ」

川崎市第三庁舎1階ロビーに設置されている等身大のブロンズ像です。

「キリエ」とはキリスト教のミサ中の祈りで「主よ」という意味。後に「エレイソン（憐れみ給え）」と続く。

この作品が日展に発表されたとき（1974年）、NHK教育テレビの美術番組でも紹介されましたが、アナウンサーに「…き・り・え…です、か？…？」と、あからさまに「なんだか…ヨク、ワカラナイ？」という紹介をされてしまったのが印象に残っています。

父は1950年代から「鎮魂誦」「使徒」など、キリスト教にテーマをとった作品を多く制作しています。が、父にとって、それらの作品テーマは、「キリスト教という宗教に対しての信仰の為」に求められたものではなく、あくまで、芸術表現の核として、自身が当時最も敬愛していた「欧州の宗教



美術、宗教音楽」に対する自己の感動、愛情に材を求めたと考えるのが妥当でしょう。ただ、特筆すべきは、決して欧州の宗教美術の模倣にはならず、精神性及び、美術造形的な解釈の仕方、組み立て方はまったくのオリジナルになっているということ。

父のキリスト教をテーマとした作品としては比較的后期の作品です。



「キリエ」

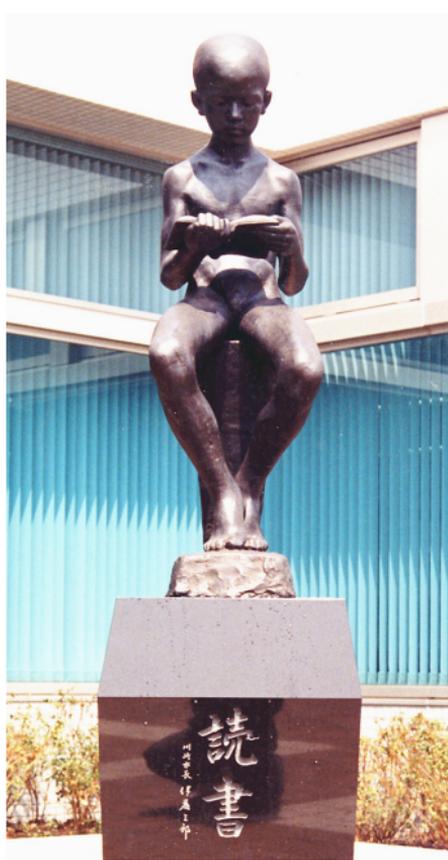
「読書」

1988年、川崎市立高津図書館が新設されるに当たり、川崎西ロータリークラブによって寄贈された作品です。オリジナルは1955年、日展に発表された「読書する少年」。

この作品は、父にとって、とても思い出深い作品だったようで、この作品にまつわる思い出話を繰り返し聞かされた記憶があります。

この作品を制作発表した1955年。長江録彌29歳。長女誕生するも、妻、結核により隔離病棟に入院。定収入も無く、生活状況は劣悪だったようです。

この年まで彫刻（日展。日彫展。白日会。）だけで無く、洋画の会（光風会。日本水彩画会。）にも出品し続けていました。絵画は一度も落選することは無かったのですが、彫刻は入選したり、落選したり。制作に手間も暇も費用もかかるのに、ち



「読書」



つとも売れない彫刻などやめて、絵画一本にしてしまおうと、本気で考えていたようです。それまでは、日展彫刻部において最も妥当性の高いモチーフだと思われる「モデルを使った裸婦像」を主に制作、出品していたのですが、初めて、近くに住んでいた少年にモデルを頼み、少年像を作ることにしました。これが落選したらもう彫刻はやめようという思いで、ただひたすら一心不乱に制作したそうです。幾つかの偶然が重なったのか、一念天に通じたのか、この「読書する少年」はそれまでの「長江録彌の作品」を超えた作品となり、日展彫刻部でも注目を集め、それ以後は落選するどころか、様々な受賞を重ねるようになります。翌年から、絵画の会に出品することはやめになりました。

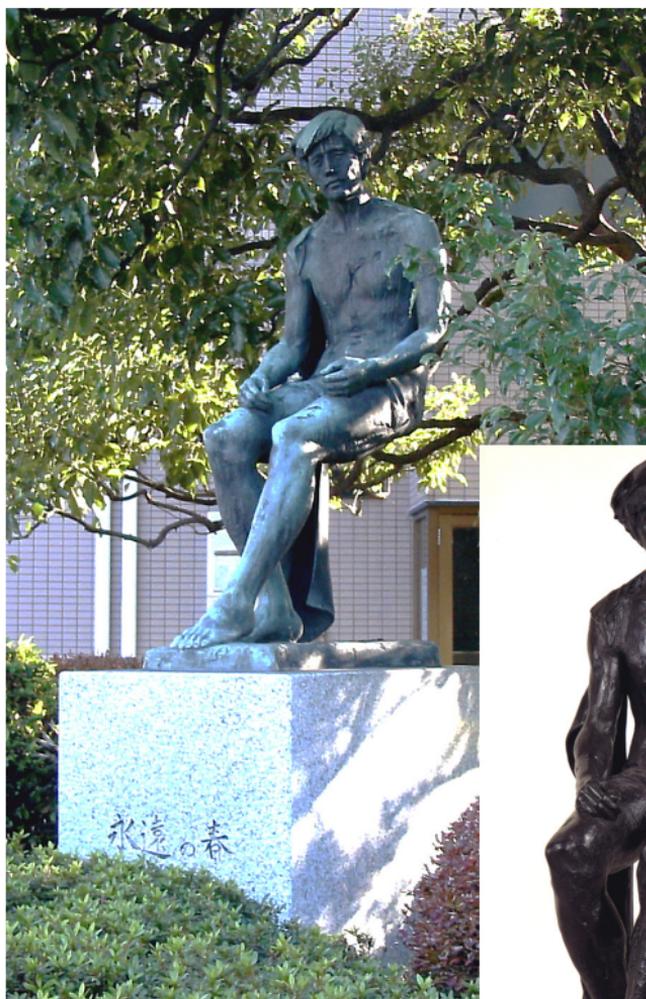
「永遠の春」(ロードスの印象)

川崎市麻生区の弘法の松に設置されているブロンズ像ですが、オリジナルが日展に発表されたのは1978年。

73年、77年とそれぞれ数ヶ月に亘る欧州旅行を経て、自らの作風に新たな展開を見出そうとし、其れが明確な形を取り始めた頃の作品。

父には、何度か大きな作風の転換期がありますが、この作品から父の作風は、それまでの「大胆な引き伸ばし振りなどによる斬新なフォルム構成、またそれによって生み出されるドラマチックな精神性を際立たせた傾向」から、「より静かで堅固なフォルムの内に、深い精神性をたたえた彫刻」を目





「永遠の春」



「ロードスの印象」



指すようになります。その、敢えて時代の流れに逆行するような「クラシカル」な作風への転換は、当時、賛否両論有りましたが、父はその後この傾向を推し進め、結果として、それまでの「日展彫刻部の中では斬新ユニークな作風の長江録彌」に決別し、新たな独自の道を歩み始めることとなります。

「使徒 (小)」「頌歌」「牧神の午後」

父は1970年代前半から、当時まだあまり一般的でなかった蠟彫刻、蠟型鑄造に強い関心を示し、試行錯誤しながら、独自のテイストを持った、蠟の手捻りによる小品、中品を数多く制作しました。当初は、鑄造家達も手探り状態だったので、鑄込みの段階で失敗し、せっかく作った作品が台無しになってしまうということも間々あったようです。が、その後、イタリアで本格的に蠟型鑄造を学んできた若い鑄造家が増え、そんな悲惨な失敗はなくなりました。父は比較的早くから蠟彫刻に手を染めていたこともあり、文化庁の派遣員としてイタリアで蠟型鑄造を学んできた鑄造家達によって結成された「蠟型鑄造研究会」に乞われ、研究会、講習会に講師として参加協力もしていました。

この「使徒」や「頌歌」は父の蠟の手捻り作品として、典型的なスタイルを持っています。その特徴の一つは、普通、塑像には欠かせない「心棒」を使用せずに製作するということ。それにより、製作途中の作品を、大胆に切ったり繋げたり振じったり、自在に変化させることが可能になります。ま





「使徒」(小)



「牧神の午後」



「頌歌」



前頁へ



次頁へ



た、蠟という素材の性質をうまく利用し、粘土では制作不可能なような薄い部分、細い部分を作ったり、熱で溶かしたり垂らしたりして、蠟彫刻独特の肌合いを生み出していきます。

「牧神の午後」は、座った裸婦は油土による塑像、それ以外は蠟の手捻りで作り、それぞれ石膏や樹脂で型取りした後、改めて蠟型鑄造でブロンズに鑄込んだものです。どこか非現実的な、不思議なムードが醸されているのは、その素材や技法によるものだと思います。この座った裸婦のモチーフは、その後、川崎市高齢社会福祉総合センターに設置されている「目覚め」に発展していきます。

頭像「戸張満江像」「カールベーム」

長江録彌の作品群の中で、大きなウェイトを占めるもの一つに、肖像彫刻があります。歴史上の人物、有名政治家、会社役員、地域に貢献された方、家族友人、等々、それらを合わせると、いったいどれほどの数に上るでしょうか。百は軽く超えているのではないかと思います。

父の肖像彫刻には、確かに、名品、佳品といえる作品が多々あるように思います。最晩年に取り組んでいたのも、主に肖像彫刻でした。父は肖像彫刻について、顕然たるプライドと明確なポリシーを持っていました。

ここに紹介した肖像作品の中で、「戸張満江像」に用いられている「脱活乾漆（脱乾漆）」という彫刻技法、素材について簡単に説明します。



前頁へ



次頁へ

「脱乾漆」は、漆と麻布を何層にも張り重ねて作り上げる彫刻技法で、我国では白鳳期（7世紀末）から天平期（8世紀）にかけて、数多くの傑作が残されました。興福寺の、阿修羅像を始めとした八部衆像、十大弟子像。東大寺三月堂の不空羂索観音像を中心とした諸像、等々。なかでも、唐招提寺の「鑑真和上坐像」は、脱乾漆像の傑作であるばかりでなく、世界的な肖像彫刻の傑作として高く評価されています。

脱乾漆像は、木像、石像、ブロンズ像等に比して、最も温かく、柔らか味のある素材感を持ちながら、それらに匹敵する堅牢性をも備えていることを特質としますが、そのことが千数百年の歴史によって証明されているのも特筆されるべきでしょう。

「脱乾漆」は平安期以降、ほとんど姿を消してしまいましたが、昭和になってから、山本豊一先生を始めとするごく少数の彫刻家達により彫刻技法として改めて取り入れられ、復活しました。父は、昭和30年代初頭からほぼ独学で「脱乾漆」を試作し始め、30年代半ばから日展、日彫展に「脱乾漆」による作品を次々と発表、日彫賞、奨励賞、特選、菊花賞などを連続して受賞していくこととなります。以後「脱乾漆」は父にとって「十八番」となり、平成3年の「日本芸術院賞」も「脱乾漆」の「砂丘」で受賞しました。

父の「脱乾漆」は天平期の技法とは少々異なるのですが、作者の意図に従い最後までじっくりと仕上げられる点は「脱乾漆」特有で、この「戸張満江像」も父の「脱乾漆」の特徴





「カールベーム像」



「戸張満江像」



「多摩川」



が良く現れた貴重な優品だと思います。

陶壁「多摩川」

1992年、現在の場所に高津区役所が移転されるに当たり、川崎西ロータリークラブによって寄贈された、長江録彌の残した唯一の大陶壁作品です。

縦3.4 m、横7.4 m、236ピース、総重量約10トン。数多くのスケッチと幾つものマケットを試作、検討した後、愛知県瀬戸市の陶壁製作工場に、父と私と三人のお弟子さんで、幾日も泊り込んで作り上げた力作。

このサイズのレリーフになると、絵画のように垂直に立てて制作することが出来ず、床にベタに置き、作品の上に幅30 cm程の簡単な橋(板)を渡し、その上に乗り、それを移動させながら制作しました。その為、制作中は全体を俯瞰的に眺めることはもちろん、部分的にも距離を取って見ることが不可能であるにも拘らず、完成作品としてはかなり離れて観賞されることを想定しなくてはならなかった為、とても難しい制作だった記憶があります。

父が、描画にも非凡な才能を備えていたことは、知る人ぞ知る事実です。そんな父の「絵心」と「遊び心」が鏤められた巨大レリーフで、父の業績の中でも貴重な作品です。

「ペンギン」

1955年。川崎市立久本小学校創立に際し、御依頼を受け、



前庭の池の中に置く噴水として制作した作品です。

父は、若い頃、比較的多くの動物作品を制作し、且つ、それらが幾つかの展覧会で受賞を重ねるなど対外的な評価を受けてもいました。其の為、この久本小学校のペンギンだけではなく、ペリカン、小熊、白鳥などの動物作品を、当時、幾つもの幼稚園、小学校に制作設置したようです。ただ、それらの作品が、当時の流行もあり、また、予算の都合もあって、ほとんどがセメントで作られており、一般的にセメント彫刻は雨ざらしの状態だと15～20年が寿命であると言われていた為、現在、観賞に堪える形で残っているものが幾つあるかわかりません。例に漏れず、久本小学校のペンギンも創立30周年を迎える頃には痛みが激しく、校舎、校庭も全て建て直されるにあたり、廃棄も検討されたようです。が、その池は、いつの間にかペンギン池と呼ばれ、校門脇にあって、登校時、下校時、いつも子供達を出迎え見送っていたペンギンは、多くの在校生、卒業生に強く愛されており、要望により、恒久性の高いブロンズ像に作り変えて残そうということになりました。ですので、現在のペンギンは1985年、久本小学校創立30周年に際し、新たに制作設置された二代目です。

2005年、久本小学校は創立50周年を迎え、50年前、20年前の事情など知る由も無い児童達により記念事業が計画、催されました。今回は、在校生、卒業生、P. T. A. のアイデアで、ペンギンをデザインしたシンボルマークが制作され、児童の描いたペンギン像が記念誌の表紙を飾り、ペンギ



ンをかたどった人文字の航空写真が撮影され、記念式典に於いて作者に感謝状が贈られることになりました。二代目のペンギンも、初代に劣らず児童達に愛され続けていたことが良く分かりました。奇しくも、その2005年度が始まったばかりの4月6日、児童達の嬉しい企てを聞くことも無く、父は遠くへ旅立ってしまいました。



二代目ペンギン (上)
初代ペンギン (右)



長江眞弥紹介

1958年、川崎市高津区に生まれる。長江録彌氏の長男。

青山学院大学文学部在学中よりデザインスクールで絵画、デザインを学び、卒業後、光風会絵画研究所、太平洋美術学校を経て東京学芸大学美術科彫刻研究室で橋本堅太郎教授（日本芸術院会員。現日展理事長。）に彫塑を学ぶ。

1985年より社団法人二紀会に彫刻を出品。二紀会及びそれ以外の川崎市展、神奈川県展、昭和会展などのコンペティションでも受賞を重ね、1995年二紀会会員（後退会）。1989年より、母校、青山学院大学文学部教育学科で美術教育に携わり、現在に至る。2004年、初の彫刻個展を日本橋三越本店にて行う。

抽象、具象にとらわれない作風に特徴がある。

少年、青年時代と長らく父録彌氏の男性像の作品モデルを勤めた。また、早くから父録彌氏の制作に、その片腕として、重要な役割を果たしてきた。その関係は単なる親子にとどまらず、常に同じ彫刻家として父録彌氏の長い作家活動を支えてきた。氏自身の作品も、川崎市のあちこちで見ることが出来る。その中で、1988年高津図書館が移転新設されるにあたり、その前公園入り口に氏の作品が設置されたが、同じときその図書館玄関前に、父録彌氏の作品も設置された。奇しくもここでは、父と子の作品を一度に観賞できる場所となったわけである。



「楽想～ソレイユ」

この作品は、音楽を奏する天使のシリーズのひとつとして作りました。「楽想」は、そのシリーズ全体の題名で、「ソレイユ」は、この作品につけられた副題です。「ソレイユ」とは、フランス語で「太陽」「向日葵」の意味だそうで、メロディーやリズムが太陽に向かって華やかに舞い上がって行く様を、天使の姿を借りて表したものです。

素材は、ロストワックスという鋳造法によるブロンズで、その鋳造法の特質と、作家の技法上の特性により、厳密な意味で完全一品制作となっています。

作者の最終的なタッチやディテールが、最も緻密に精確に表現できるのもこの技法の特徴で、また、その特質を生かすべく、ブロンズの地金そのままに、表面に一切の塗装処理を行っていないため、微妙な色むらがあり、今後も月日を経て次第に、自然に色に変化していくのも趣深いものです。

長江眞弥作品名	19 ページ	楽想～ソレイユ
	20 ページ	1 見張り塔からずっと
		2 RELATIONS
		3 明日ならここで
		4 RAIN





前頁へ

21



次頁へ

目次に戻る



前頁へ



次頁へ



あとがき

川崎西ロータリークラブで親しくおつきあいいただいていた長江録彌氏が急逝されてから、1年になります。氏の死を悼んで、このたび「こすもす文庫」として、長江録彌・眞弥という彫刻家親子二代のご紹介をさせていただきましたが、改めて氏の大きさ、たぐいまれな才能に目を見張っております。

とかく芸術とは、人間の基本的な生命活動、すなわち衣食住とは直接関係ないだけに、非常にあいまいなものがあるように思いますが、もし生活の中から文化的なものを取り除いてしまえば、人間が本来持っている真善美に対する希求が切り捨てられ、精神的に非常に貧しい状況に陥ってしまうのではないのでしょうか。

古来からあらゆる民族は、超自然的な事象を、音楽・美術という形で表し、さまざまな創造を生み出してきたことは、歴史が物語っております。

人間をより高く引き上げる芸術に目を向け、心の宝、精神の拠り所とすることは、社会に潤いをもたらすことと思います。そのような観点から、氏の作品が川崎市に数多くコレクションされ、展示されていることに誇りを覚えずにおられません。

川崎市ゆかりの彫刻家「長江録彌の世界」は氏のご長男である眞弥氏に執筆をお願いいたしました。ご多忙のところご執筆いただきましたことに、心より感謝いたします。

録彌氏のご冥福と氏の作品がいつまでも愛されることを祈りつつ、こすもす文庫発刊のご挨拶といたします。(戸張道也)



長江録彌 Nagae Rokuya

- 1926年 愛知県瀬戸市に生まれる。
- 1948年 多摩美術学校(現・多摩美術大学)彫刻科を卒業。円鍔勝三に師事する。
- 1964年 第7回日展に「芽」を出品し、特選を受賞。
- 1965年 第8回日展に「乾漆作品の一」無鑑査出品し、特選を受賞。
- 1966年 第9回日展に「憩」依囑出品し、菊華賞を受賞。
- 1967年 第10回日展「脱衣」新審査員
- 1980年 日展評議員に就任。
高津市民館(現男女共同参画センター)「叱られて」設置
- 1984年 第3回高村光太郎大賞展に「倒れる」を出品し、優秀賞を受賞。
- 1986年 第18回日展に「思考」を出品し、文部大臣賞を受賞。
- 1991年 第22回日展出品作品「砂丘」により日本芸術院賞を受賞。
- 1992年 日展理事に就任。
- 1995年 日本芸術院会員に就任。
- 1996年 日展常務理事に就任。
- 1997年 神宮美術館「猿田彦神」収蔵
- 1998年 瀬戸市名誉市民となる。日本彫刻会理事長に就任。
- 1999年 紺綬褒章叙勲
- 2000年 勲三等瑞宝章叙勲

主な収蔵先

式年遷宮記念神宮美術館(三重県) 覚王山日泰寺(名古屋) 海南こどもの国(愛知県) 小牧市(愛知県) 蟹江町(愛知県) 祥雲寺(瀬戸市) 瀬戸市陶生病院(瀬戸市) 名古屋ポートビル(名古屋市) 高津図書館(川崎市) 高津区民館(川崎市) 高津区役所(川崎市) 宮前小学校(川崎市) 新町小学校(川崎市) 平中学校(川崎市) 福祉柿生学園(川崎市) 高齢者福祉センター(川崎市) 南部身障者福祉会館(川崎市) 宮前区役所(川崎市) 第三庁舎(川崎市) 影向寺(川崎市) 円福寺(川崎市) 法清寺(東京都台東区) 片倉城址公園(八王子市) 東京工科大学(八王子市)



長江眞弥 Nagae Naoya

- 1958年 川崎市高津区に生まれる。
- 1982年 青山学院大学文学部日本文学科卒業。
- 1985年 東京学芸大学 美術科研究生修了。
- 1986年 二紀新人選抜展出品、佳作賞受賞。
学校法人塩原育英会正門（川崎市中原区）に作品設置。
- 1987年 第23回神奈川県美術展 特別奨励賞を受賞。
- 1988年 第23回昭和会展 林武賞受賞
川崎市立高津図書館前公園に作品設置。
川崎市市民ミュージアムへの道彫刻展 市長賞受賞。
同作品 等々力緑地に設置
第42回二紀展 安田火災美術財団奨励賞受賞。
- 1990年 川崎市美術展 特別奨励賞受賞。
- 1993年 第47回 二紀展 宮永賞受賞。
青山学院大学文学部教育学科兼任講師として勤務（現在に至る）。
- 1996年 第50回 二紀展 会員賞受賞。
社団法人二紀会を退会。
- 2000年 川崎市特別養老老人ホーム「陽だまりの園」に作品設置。
「かわさきアートアニュアル2000」出品。
- 2004年 川崎市制80周年記念文化展「川崎ゆかりの美術家特別展」招待出品。
日本橋三越本店にて初個展。

主な収蔵先

高津図書館（川崎市） 川崎市等々力緑地（川崎市） 陽だまりの園（川崎市）
学校法人塩原育英会（川崎市）



こすもす文庫 ⑨

川崎市ゆかりの彫刻家

長江録彌の世界

発行 2006年5月12日

*

発行者 こすもす文庫代表 戸張満江

*

発行所 戸張会計事務所

〒213-0002 川崎市高津区二子 5-1-15

電話 044-833-4361 (代)

FAX 044-844-6035

ホームページ URL : www.tobari-kaikei.com

キーワード検索 : 戸張会計・tobari-kaikei・

とばりかいけい・トバリカイケイ

*

編集・制作 有限会社田園都市出版

電話 042-780-2405



前頁へ



次頁へ

目次に戻る

戸張 公認会計士 事務所 税 理 士

税務・経営・監査

こすもす簿記システム(当社開発自計用簿記)導入指導

〒213-0002 川崎市高津区二子 5-1-15 高津駅 3分

TEL 044-833-4361 (代) FAX 044-844-6035

HPアドレス(URL) : www.tobari-kaikai.com

こすもす教室

パソコン、生花、茶道、料理、英会話教室などにご利用いただけます。午前、午後、夜、曜日別月契約となります。

所在地：川崎市高津区二子 5-1-15 高津駅 3分

お申し込みは戸張会計事務所：電話 044-833-4361

こすもすホール(貸ホール)

www.cosmos-shop.com/hall1/

ダンス、バレエ、リトミック、気功、ピアノ、カラオケ、コーラス、パソコン教室、簿記教室、料理教室などにご利用いただけます。

午前、午後、夜、曜日別月契約となります。

ひさもと：川崎市高津区久本 2-2-1 洗足学園手前

さかど：川崎市高津区坂戸 1-6-9 イトーヨーカ堂先

お申し込みは戸張会計事務所：電話 044-833-4361

スパゲッティとドリアの店 ファーム

川崎市高津区久本 2-2-1

洗足学園手前交差点角

TEL 044-865-8118

各種パーティ、ご宴会のご予約を承ります。



前頁へ



次頁へ

目次に戻る

